

# お願いマスター

現魅 永純

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

筋肉は全能ではないが、万能である。

鍛え上げれば限界値が上がる。鍛え上げれば岩さえ砕ける。鍛え上げればサーバーを倒せる(?)。

さあ、君も筋トレ始めよう！

はいマッスル！

再度く、マッスル……再度……サイド……。

「はいッッ!! サイドチエスト!!」

# 目次

炎上汚染都市：冬木

世は燃える

1

異に散りゆく先行きは

11

ヒトの歴、チリとなる

22

肌刺す熱に

34

元世を想き

51



## 炎上汚染都市：冬木

## 世は燃える

座にて

「イエーイピースピース！ やっぱあたしちゃんつてば超映えるわ！ 座だから時間概念とかねー……のは逆に辛くねツ!? あたしちゃんつて今どのくらい座に居座つてんの!?!」

『……清少納言とのリンク、完了。英霊召喚システム起動。汝との契約を結ぶマスターを確認。清少納言、応えよ』

「いや普通にやつすわ。だつて傷つくんしよ？ 痛いんしよ？ ファンデとかコンシーラーじゃカバー出来ないレベルの傷もありえるんしよ？ 座であたしちゃん磨いてる方が得じゃん。記録から干渉して他の鯖ちゃんとも交流会出来るし!」

『……清少納言、この座に於いては時間概念が存在しない。あるのは全ての世界線に於

ける記録保持のみ』

「? それがどしたの、ガイアちゃん」

『……記録そのものの抹消を行えば、汝の存在は座からも消滅する』

「——へ?」

『……無論、相応の記録を積めば強固な存在として確立させられる。しかし記録を積みまねば、強固な記録に押しつぶされ、いずれ汝の記録は抹消されるだろう』

「マジで?」

『マジだ』

「……い、いやでも……弱いあたしちゃんが召喚されても迷惑だろうし……」

『……汝がサーヴァント抜きで人肌に触れたのは何時だったろうな』

「ひうつ」

『……自分を磨くだけの存在に振り向く者はいるのだろうか』

「にやうつ」

『……汝はいつまでギャル処——』

「分かったからやめてえ! テンションあげばよで行きたいのにつらたんモードとかちゃんマスにも失礼つしよ?! 召喚される前に精神攻撃とか何考えてんのガイアちゃん!」

『……召喚システムに接続。清少納言とのリンク、完了。世界線、確定。英霊召喚を始める』

「あ、やつは真面目ちゃんだあ。クソオ、実物があれば肘打ち食らわせてやんのに！ つてちよつとボディロス体の消失早くないソルパブ心の準備まだ終わって——」

『……記録は固定概念ゆえ、消滅する事などあり得ないのだが』

「おいコラ最後に嘘告すんじゃないねっ」

◇ ◆ ? ◇

「……マシユさん、英霊召喚ってこんなに長引くものなのかな？」

「ど、どうでしょうか……。私の記憶にある限りだと、英霊召喚は準備さえ済んでいれば、後は召喚詠唱を唱える事で完了します。時間が掛かるのは、恐らく英霊召喚システムに負荷が掛かっている。つまり強大な魔力による召喚が行われている……から、かもしれません」

『いや、どうやらマシユの推測は外れている様だ。確かにサーヴァントの反応を感じるが、強大な魔力反応はないよ。だから考えられるのはもう一つ。英霊としての確立に手間取っているって事じゃないかな？』

「ロマンニさん。それは要するに、サーヴァントとしてはあやふや……という事ですか？」  
『そういう事になるね』

まさか英霊の座で拒否を起こしていたなどとは思わない彼らは、この獄炎の地にて光り続ける陣を見ながら考察を立てる。

特異点F。カルデアが崩壊し、漂流した先に存在した世界。現代とは遠く離れた地獄絵図。それがこの場所だ。

ある方法で難を逃れた先にて、彼ら——藤丸 立香とマシユ・キリエライト、オルガマリー・アニメスフィアは合流し、やがてロマンニ・アーキマンとの通信も繋がり、方針を決めて最初に「英霊を召喚しよう」となったのである。

「というかロマンニ、どんな英霊が現れるかの推測くらい立てられないの？」

『む、無茶を言わないで下さいよ所長。カルデアの記録に残されている英霊のデータは少ない。既存のデータと一致するか、よほど有名な英雄ならば可能でしょうけど……』  
「使えないわね」

「まあまあ、そう言わず。……あ、ほら。そろそろ現界する様ですよ」

光り輝く盾の上にサークル上の光線が広がり、中心に収束し、形と為す。幻想的な光景。誰もが目を奪われるその場所で、派手な髪色をした一人の少女が目を閉じて現れる。

「まったくあのガイアちゃんめ今度会ったら右ストレートくらわせんごつごつふ——  
召喚に応じ、参上致しました。アーチャーのサーヴァント、清少納言と申します。既に筆を置いた我が身ではありますが、このあふれる知識が……役立つ……？」

いやもう取り返しつかないレベルまでしつかりと自が出ていたのだが、そこはそれ。サーヴァントはサーヴァントらしくあれ。相応の取り繕いをして自己紹介をしていたが、その目を開けると同時に言葉は失速する。

その目は獄炎の地を移した。つまり、崩壊した世界。特異点を目の当たりにし、清少納言は硬直する。

「かえりゆ」

「え、ちよつと!?!」

「いやだよー無理だよー!　なんで人理崩壊してんの!?!　そんな世界なんて聞いてない

よガイアちゃん！ てつきり普通の聖杯戦争で多少なりとも現代生活できるんじゃないかと期待しちやっただじゃん！ 告白されっぱであたしちゃんイケてる風潮期待したのに！」

「……これは」

『なんとも奇妙な英霊を引き寄せてしまった様だね……』

突然の帰還発言に驚愕するマシユと、駄々をこねる様に首を振る清少納言。オルガマリーは冷たい目で見ており、ロマニ・アーキマン——通常ロマンは、苦笑して事態を認識する。

オルガマリーは駄々をこねる清少納言を見て、目を閉じて、視線を立香へと移した。

「藤丸、こと契約に於いての全権利は貴方に託されているわ。この子をどうするかは、貴方が決めなさい」

「分かりました」

マスター適性が薄く、サーヴァントを召喚出来るほどの器量がなく、実力はあるが相應の自信を持ってない。それがオルガマリーという魔術師だ。

しかし、それに見合わぬ程の冷静沈着さを見せる今のオルガマリーに、ロマンは違和感を覚えた。こう言つては何だが、目の前にいる英霊がとても使えるとは思わない。

確かに英霊だし、相応のスペックはあるのだろう。でもオルガマリーが安堵を覚えるレベルの能力を有してるとは思えない。というか、自分の護衛すら命じさせず、ただただどうするかを立香に任せるといふ事実自体にも納得がいかないのだ。

一体通信が繋がる前に何があつたのやらと考えていれば、立香はいつの間にか清少納言の前に居た。

「清少納言さん」

「何さ！ 貴殿があたしちゃんのちゃんマスですかイッ!?」

「うーん、多分そうなるのかな」

最早喋り方すら統一しなくなっている。

しかし特に気にした様子もない立香。彼は始めからコミュニケーション能力ははずば抜けていた。このカルデアに入ってきた時も直ぐにマッシュと仲良くなっていたし、なんとオルガマリーとさえ打ち解けていたのだ。

恐らく、この20と生きていない人生の中でそれ程までに癖の強い人種と対話してき

たのだろう。多少喋り方に特徴があったり、見た目が特殊だろうとも、全く気にしない素振りです普通のコミュニケーションが取れるのは、一種の才能だ。

「こんにちは、清少納言さん。僕は藤丸 立香。宜しく……って言いたい所だけど、あまり気は乗らないかな？ 英霊とは言え、流石に僕も無理はさせたくない。貴方が望むなら、戦闘はなるべく避けるよ」

「えっ、サーヴァントに戦闘命じゃないの!? どゆこと!?!」

「貴方も生きていた人間だ。だったら傷付きたくないっていうのは当然だよ。サーヴァントだからとか、魔術師だからとか、そういう分け隔てはなるべく無くしていきたい」

やりたい事をやれるのが一番だからね、と。この人理崩壊まっしぐらの時に、なんとも平常心でいる立香。清少納言はその安心させられるような声音と、爽やかな笑顔に一瞬で堕ちた。

「あの……契約します……♡」

『凄いな藤丸くん?!? ……ん?』

「本当かい? じゃあ僕は最大限、尽力するよ! そう、最大限……サイ……」

『話の途中でごめん、敵反応！ この魔力値は……恐らくシャドウサーヴァントだ！  
全員戦闘準備——』

「はいッツ!! サイドチェストオオオオオ!!!」

「へ?」

『えっ?』

「やっぱり、相変わらずの化け物っぷりね」

「流石です、先輩!」

—— 拜啓、ガイアちゃん。

抑止力が嘘を吐いて一人の少女を追い出した後、いかがお過ごしでしょうか? ……  
あ、時の概念ないんならお過ごしも何もねーわ (笑)。

リアルタイムで観察してんのよな? いや、既に記録として残ってる? イエーイ  
イエーイ見てるう? なんかね、魔術師でもないらしいマツチョマンが、汚染されてる  
ゆーてもサーヴァント相手に殴り勝ちやったんですわ。これ人理的にどうなの?

……セーフ？ 人理ガバガバだから？ 水着でクラスが変わる世界で既存の記録など無意味？ なにそれ？

いやね、もうなんというかね。人理修復なんて出来るわけないやんと。そう絶望した矢先に爽やかイケメンスマイルですよ？ 直後にマツチヨマンですよ？

いやー……。

(思考するの) 無理ぽよ

## 異に散りゆく先行きは

『いやいやいや、ちょっと突っ込みどころがありまくるよ!!』 というかこの役は所長が担当するべき箇所でしょう!?』 なんて悟った様に澄んだ瞳で当然の様に佇んでいるんですかっ!』

「なにを言ってるの? 藤丸ならこの程度当たり前でしょう?」

「はい! 私も私を押し潰していた瓦礫を退けて守る為に膨張した筋肉で覆われた時はビックリしましたが、シユミレーションとは言え最高峰のドラゴン相手にも殴り勝つてましたから、先輩ならば当然です!」

『膨張じゃないよね、進化してるよね明らかに! 最早別生命体だよアレ!』 というかマシユ、まず魔術師でない一介の人間がドラゴン相手に勝つ事に違和感を! ……いや、人間……? 人間なのかな……?』

「あはは、酷いなロマニさん。僕は正真正銘、タダの人間ですよ」

『君がタダの人間なら、僕はきつとミジンコだな』

——いや、実際のところ、何故勝てたのかという点に関しては理解可能だ。立香は経歴的に魔術師ではないが、マスター適性は高く、魔術を決して使えないわけじゃない。サーヴァントやエネミーには神秘を含む攻撃がなければ通用しないが、魔術には神秘が含まれている。

理論上、魔術さえ発動させていればダメージは与えられるのだ。

しかしここで問題点が一つ。立香はどうやって魔術を発動させたのか。確かに魔術適性があるとは言え、それと使えるか否かは別問題。なんせ立香は、カルデアに来るまで魔術の「ま」の字さえ知らなかったのだから。ともすれば、魔術回路を開いていないのは一目瞭然。

どれだけ優れた血筋でも、魔術回路を開く際には激痛を伴う。それは魔術師であれば誰もが知っていること。ともすれば、やはりおかしい。藤丸 立香という少年が医務室に運ばれたという事も、軽く蹲るといふ行動すら起きなかった事も。

魔術回路が開いていないならば納得できる。しかしシャドウサーヴァント相手に殴り勝ったという事実を目の当たりにした以上、開いている以外の事実はあり得ない。

『……藤丸くん、これは至って真面目な質問なんだけど』

「? 今まででは真面目じゃなかったんですか?」

『いやそういう訳じゃないけどね。何というか、全魔術師の沽券に関わる問題とだけ……』

「ああ、そういう……。ロマニ、この子に魔術関連の事を聞こうとしても無駄よ? だって藤丸、自分が魔術を発動させてる事すら理解してないもの」

『……!?!』

ロマンは驚愕する。

そうだ。確かに自分の魔術の事を詳しく知らず、勘違いしたまま発動する魔術師は偶に存在する。無意識に使う例も無くはない。

しかし、基本的に初回を除けば、全ての魔術師は意識して魔術回路を開き、魔術を発動せねばならない。無意識に、なんてのは、発動させるのが当たり前と言われるレベルまで使い込んで初めて完成するもの。その境地に、理解を示さないまま到達している。驚かない筈がない。

というのも勿論一つなのだが。

『所長……いつの間にそんなに察しが良くなったんですか!? なんか余裕ある感じが納

得いかないと言うか、最早別人……はっ、さては別人!？」

「グーで殴られるのとパーでビンタされるのとガンドで撃ち抜かれるの、どれが好みかしら？」

『全てに対する拒否権を行使させていただきます。いえ、すみません。今のは全面的に僕が悪かったです』

「そう、二徹で働くに留めておいてあげるわ」

『ぐおおお……中々にキツイ条件だ。……それはそれとして、大丈夫かい？ さつきから清少納言が喋ってない様だけど』

別人なのでは？ と、そう疑われたオルガマリーは心外だと非難する様にグー・パー・指銃を順番に披露する。いや、実際問題、マシユからしても今のオルガマリーの態度はロマニの意見に賛成気味だ。こう言ってはなんだが、オルガマリーは少々ヒステリック染みた部分が少々あり……常に余裕が無かった。

普段からプレッシャーに耐えている。それこそ幼少期の頃からだ。寧ろそうならないう方こそが変だと呼べてしまう過去。

だからこそ、今軽口を叩けるレベルまで余裕を持ち、尚且つ周りのことにすら一瞬で気付いてしまう察しの良さに、驚愕せざるを得ない。

しかし、それは良い結果だ。決して悪くなんか無い。だからこそロマンは命じられた罰よりも、ほんの少しの嬉しさが勝り、口元を緩める。

そんな自分に気付いたのだろう。ロマンは顔をムニムニと揉みつつ、先程から一切喋らずただただ後を着いてくる清少納言に話題転換した。

「清少納言さん？」

「どうえっ!? な、なに? どしたのちゃんマス!？」

「いや、ボーツとしてどうしたのかなって」

「あ、うーん……どうしてあたしちゃんは呼ばれたんだろ、って思っつて」

まあ、先程衝撃的な映像を見たのだ。生身の人間が汚染されてるとはいえサーヴァントを吹っ飛ばすなど、サーヴァントこそがビックリする事象。清少納言は特別強力なサーヴァントとは決して言えないが、それでも現代の人類相手なら普通に勝てる程度のスペックは持っている。

これで驚かないのなら、それは立香の筋肉を見て逆にワクワクする様な戦闘狂くらいなものだろう。

それとは別に、清少納言は自分が呼ばれた理由を問う。

「……そうだね、マシユさんと似て非なる存在ってどんな子なんだろうって」

「うん。……うん？ え、それだけ？」

「あ、いや。勿論他にもあるよ？ 戦力になるなら所長を護衛して欲しかったし、対抗手段は多くあつた方がいい。そうでなくても、今存在するのはカルデアの人々だけではないって確信があるだけで、ずいぶん気が楽になるからね」

「いやいや！ もうちよつと他にあるでしょ!? 私って一応サーヴァントなんだけど！」

「……?」

「マジなの亘なの!? 無理やり戦いの場に引き摺り出すとか——その、自分でいうのもなんだけど、死人な訳だし！」

本気で他の理由なんて無いと、そう汗を散らして困惑しながら考えている立香に、清少納言は『何故自分で自分を追い詰めてるのだろうか』と思いつつも喋り続ける。

それほどまでに理解不能だ。何せ清少納言の言ってる事は正しいし、魔術師ならば当然その手段を取る。合理的な手段なのだ。だから立香の言葉に困惑してしまう。

「死人なんだから死ね、なんてのは言えないよ」

「え？」

「意志がある。思考が存在する。願いがあある。『生きる』って、命の有無だけを指すモノじゃないと思うんだ。だから君の名は後世に届き、この場に立っている。清少納言という存在は、今ここで生きている」

何処にしまっていたのか、立香は枕草子を取り出しながら喋り続ける。いやホントに何処にしまってたのだろう。今の立香の服はボロボロで、上半身は裸だ。下半身は超伸縮性アンダーパンツは履いているが、隠し持てる場所はない。

二人以外の全員が共通して思ったが、突っ込んではいけない事だと理解してその場の話をお先させる。

「僕は生きている君の意思を尊重したい。それ以外を選ばせてしまつては、君の意思を殺してしまうから」

「ちゃんマスう……♡」

あ、今度こそ完全に堕ちた、と。オルガマリーとロマンは理解した。マシユは純粹に

「なるほど、生きるとは命を指すだけでない……」と感激を受けたように言葉を繰り返す。

それぞれがそれぞれの感性に揺れる中、ロマンは一つ気付いたようにはつとずる。確かに藤丸が並外れた力を持っているのは理解した。しかし汚染されてるとは言え、シャドウサーヴァントという存在への脅威は本来拭えるモノではない。

マシユやオルガマリーが怯えを見せないのは、既に体験した事だからでは？ と。最早確信にも似た推測を立て、それを前提にオルガマリーに問い掛けた。

『所長、倒したシャドウサーヴァントは何体ですか？』

「……そうね。ロマン、これは前提として言わせてもらおうわ。この特異点は、本来あった聖杯戦争を塗り替えた結果の異界。つまり、サーヴァントは全てで七機。もちろんイレギュラーがあれば別だけど」

『はい。つまり七騎引く倒した数が、残りの数となる』

「私達が遭遇したのは『アサシン』『ライダー』『バーサーカー』『ランサー』『キャスター』よ。推測通りなら、残りのサーヴァントはセイバーとアーチャーの二騎」

『……うん。なるほど。所長、貴方が先ほどの光景を見ても平然としていた気持ちが変わりました』

「でしょ？ あれはもう、ああいう生物だつて捉えないとダメよ」

きやははーと。物凄く楽しそうに立香の腕に捕まつてぶら下がる清少納言と、興味深そうに立香の筋肉を触るマシユを見て、二人は溜め息を吐く。だつて遠近感がおかしい。先程までは背の高いお兄さんくらいのレベルだったのに、今やマシユと清少納言二人とも覆えそうなほど筋肉が膨張しているのだ。

この光景に呆れるなという方が無理である。

——と、そんな呆れに現を抜かせるのも、この一時ひとときだけ。

「おっと、私の腹筋が通るぞ」

——整備が万全ではないとは言え、カルデアの魔力感知を潜り抜けて登場した目の前の腹筋……ではなく、サーヴァントに、立香はずつと見せていた笑顔をやめて即座に清少納言とマシユの前に立ち、振るわれる剣を横からかち割る。

腹筋……じゃなくて、サーヴァントが持っていた武器の方翼は崩れるが、直ぐに魔力が迸り、先程と全く変わらない剣がその手に納められた。

「ふっ……気分は最悪だが、これは素晴らしいな。聖杯をこの様に使うのは、少し贅沢だが」

「アーチャー……」

「おはよう。いや、こんにちは、か？ 少し話を聞いていたが、実に愉快だったと言わせて貰おう。まさかキャスターを倒すとはね」

「キャスターを？」

「いや実に愉快だとも。別に汚染されていた訳ではあるまいに、諸君らに倒されるとはね」

「汚染されてたわよ？ だっていきなり藤丸に襲いかかってきてたし……あれ？ でも貴方や他のみたいないな黒いモヤは無かったような」

「クク……なるほど、あの大馬鹿者め。そのキン肉マンでも見て闘争本能が働いたか。いずれにせよ、次に会った時は全力で煽ってやろう。「キャスターが死んだ！ この人でなし！」とな」

圧倒的なまでの自業自得である。

最初から交渉を仕掛けておけば、立香に殴り倒される事もなかったのだ。アーチャーとキャスターの関係性は知らないが、普通に自業自得なので庇う必要はない。

「さあ構えろ、人類最後のマスター。貴様の實力を見極めさせて貰うぞ」  
「……………」

「いや誰か登場時の台詞に突っ込めよ」

## ヒトの歴、チリとなる

「くっ……」

「そんな……先輩が、押されてる……？」

——腹筋……ではなく、アーチャーの登場から約5分。その間に立香が攻撃を与えた回数は0。それに対し、アーチャーは既に数十発もの剣を喰らわせている。

今までシャドウサーヴァントを相手に瞬殺してきた立香の押されている光景だ。当然今までを見てきた彼女たちは驚愕を隠せない。……何故かロマンは「だよね、普通はそうなんだよね！」と若干歓喜気味だが。

オルガマリーは投擲、遠距離系の魔術で援護に回っているが、アーチャーは意に返さず当たり前であるかのように回避し続けている。

苦しい様子で息を吐くカルデアの面子に、アーチャーは一つ嘲笑を零して剣を前に突き出した。

「一つ、教授してやろう」

「……」

「シャドウサーヴァントに知性はないが、理性と染み付いた感覚はある。だがステータスの変更による感覚変化に、身体がついていかない。だからこそシャドウサーヴァントは、本来のサーヴァントに酷く劣っている」

「……知性なく存在する理性が、感情を素直に出してるんだね」

「そう。貴様の筋肉とマツスルフォームには驚くものばかりだ。そしてその一瞬でしめられる攻撃力の高さにも称賛するとも。しかし、通常サーヴァントに対してはそれほど通じる手段でもない。特に私のような小狡い手段を考えるサーヴァントにはね」

目の前にいるアーチャーは、間違いなくシャドウサーヴァントだ。ロマンの観測で魔力が汚染されているのは確定している。しかし汚染度はそれほど高くなく、知性も理性も持ち合わせている。

他のサーヴァントとは違うそれに、まるで試練でも与えられてるかのような感覚に立香は陥った。



「チャージ20秒——」

「だからマシユさん、貴方に頼みたい」

「え……？」

自分たちだけじゃない。救えるかもしれないこれからの未来の死すら迎えるかもしれない、カウントダウン。もう既に半分を切った。深刻な顔で言い切った立香に啞然としたマシユへ、立香は真剣な表情で視線を合わせる。

「僕達を、守って下さい」

「——」

「貴方だからこそ頼める。それは貴方の力が、きつとそういうものだから」

立香には、生まれ持った才能があり、それを磨く為の努力を怠った事はない。だから誰に何が出来るか、何処まで出来るかという勘が非常に鋭くなっている。

マシユ・キリエライトという人間が、デミ・サーヴァントになったというのは、一目見た瞬間に確信を抱いていた。肉体の在り方がアンバランスなのだ。あらゆる筋肉を見てきた立香だからこそ理解できる。

でも、アンバランスだからこそ、何に特化した筋肉なのかがよく分かる。

「でも、力と精神力はイコールじゃない。だから強制は出来ません。万全の精神でなければ、筋肉は万能になり得ない。……安心して下さい。貴方が嫌と言うのであれば、僕はこの腕一本を犠牲にしても、あの矢を止めますから」

力強く、今まで無意識に発動していた魔術をほんの少し意識的に発動し、魔術回路を腕に浮かばせる。感覚の逆算。幾度となく無意識に使い続けた『強化』の魔術は、『硬化』の効力を以って発動される。

確かに彼の筋肉に魔術のブーストを掛ければ、腕一本を犠牲に受け止める事が出来るかもしれない。しかしそれは、マシユ・キリエイトというサーヴァントとしての意思が——そして彼女に与えられたクラスの意地が、決して許さない。

いや、それ以上に。

今まで守られてきた事実。支えるべき相手に守られてきた、事実。

悔しくて、それでも尊敬して、でもやっぱり悔しくて。追いつけないんじゃないかと悲しくて、彼の役に立てるような後輩になれるのかと卑屈になって。

そんな自分を、彼は優しく宥めて、そして頼ってくれた。ずっと自分よりも前に居た

はずの先輩が、頼ってくれた。

それに答えずして、何が後輩か。何がサーヴァントか。何が、盾騎シルダーか。

故に立ち上がる。この状況ですら一個人の精神状態を心配してくれる、心優しい先輩マスターの為に。

「いえ、やります！」

「——うん、任せるよ！ さあ盾を前に突き出して！ 盾は両手で支えて、片足は一步下げる！ 腕だけじゃなくて、全身で盾を支えるイメージ！」

ずっと見てきた。カルデアでのトレーニンググループでも、率直に言つてウザい程に繰り返されて、見続けてきた完璧なポーズ。

だから自分にもきつと出来る。見本なんて幾らでも見てきたのだ。これで出来なければ、後輩の名が廃る。

「……40秒」

その剣天に魔力が集う。邪悪で強力な魔力は、対象を睨み続ける。それは永遠の獵劍。

対象を喰らうまで幾度となく追いかける。

弓に番われたそれは、一息の間に放たれた。

空間を切り裂き、時空を超えたと錯覚させる音速。着弾までほんのコンマ数秒。その一瞬で世界の運命が崩れ去る。

だが、一瞬など。英雄の覚醒には充分すぎる時間。

ある英雄は、人が本来乗り越えられない12の試練を乗り越えた。ある英雄は、幾度も神殺しを為した。ある英雄は、何千キロと離れた場所へ一寸違わず矢を届かせた。

そんな偉大なる英雄が存在する。ならば、無限に追いかけてくる矢程度、どうしたところかと。

「フルテイニング  
赤原獵犬——ツ！」

「はいツツ！」

「サイドつ、チェストオオオ！」

爆発音。魔力の爆発。40秒もチャージされた威力に、無限追尾。技量だけでは決して防ぎきれない、アーチャーのとおっておきの一つ。

大きな煙に囲まれたその場を見て、アーチャーは一言。

「……やったな」

「うん、やったね!」

「ツ!?!」

背後からの響く声。間違ひなく「僕達の勝ち」という意味を持たせた上で放たれたその言葉に、アーチャーは咄嗟に振り返る。

目の前には立香。その筋肉は先ほどまでよりもほんの微かに縮小されてる様に見え、下半身が膨張していて、その脚には魔術回路が浮かび上がっている。しかも表面上に濃く浮かび上がってるだけでなく、その内側からさえも薄らと。

走るという行為に於いて最も重要なハムストリングスに強化を掛け、その上で身体的能力を全面的に支援する脚全体。そしてそれを支える骨に強化を掛けたのだ。

元々陸上選手並みの速さを持つていたその脚は、魔術によって強化されることで何倍もの能力を獲得する。その速さは、瞬間移動と錯覚してしまう程。

「アーチャー、君の敗因は一つ」

脚全体に浮かんでいた魔術回路は腰へと移り、また手から肩にかけての腕全体にも浮かび上がる。アーチャーは回避行動を咄嗟に取るが、上から降ってきたマシユの盾によつて移動を遮られる。

幾ら無数の修羅場を乗り越えてきたサーヴァントでも、絶体絶命の時には焦燥が現れる。英雄ならば確かに乗り越えるかもしれない。でも、完成してしまった<sup>サーヴァント</sup>英霊に、もう乗り越えるなどという概念は存在しない。

あるのは、運命的な必然のみ。

「脅威を僕としか認識してなかつた事さー!」  
 「死<sup>亡</sup>フアラグを<sup>建</sup>てなかつた事さー!」  
 「なんでさつ?!?」

——いや、そもそも単なる魔術師ですらない人間単身がサーヴァントの脅威になる事が有り得ない訳で、寧ろアーチャーはその脅威を脅威と認識した。それは褒めるべきだろう。

しかし、かの騎士王すら防ぎきれなかつた宝具をデミ・サーヴァントが受け止めるなどという想定などできまい。それだけアーチャーはセイバーの実力を知っている。信

じている。その信頼を超えたからこそ、立香は攻撃を与えられたのだ。確かに、見通しが甘かったかもしれない。

地平線を擦るなぞ様に綺麗な横つ飛びを見せながら吹っ飛ぶアーチャーは、未だに上がり続ける煙の中に突入し、その中で煌めく幻想の欠片をその目に焼き付けた。

自分が憧れたかの騎士王の、夢見た理想郷を築き上げる、一つの欠片ピース。幻想の城。

アーチャーは目を見開き、閉じ、そして微笑みながら地面へと突き刺さる。

顔の半分は地に埋められながら、ピンと張った足が消滅を始めるが、特に気にした様子もなくアーチャーは言葉を紡いだ。

「ふ……なるほど。確かに彼女は、何も自分だけでその円卓を築いた訳ではない……か」「いや弓の腹筋さん、頭ダイジョブ？　突き刺さってんだよ？　そのまま喋ってんの、二つの意味でダイジョブ？」

「……………これは新しいマッスルポーズ、『アーススタンド・アツプライト』！」「普通に突き刺さってるだけだよ、藤丸君……」

かなり心にくるモノをその目に映したアーチャーはポツリと感激を溢すが、格好が格好ゆえにあっさりとは見逃せない。清少納言は至極真つ当なツツコミを披露し、立香は

何事も筋肉へと繋げ、ロマンはそれに突っ込む。

いやもうホントに面白い突き刺さり方だから無視する事が出来ないのは分かるが、彼の意図を汲み取るべきだ。其処は流石のマシユ。まだ純粋な心を持つ彼女はアーチャーへと近付き、蹲み込んで彼へと問い掛ける。

「アーチャーさん……先程の剣には、貴方の意志が込められてる様に感じました。これ を乗り越えられたのなら、と」

「……いやはや、何のことかな？ 私は私の役目を果たすまでだ。実際、アレを防いだのは予想外だったモノでな。……しかし君のその力が私の剣を防いだのは、ある種の運命 と言うべきか……」

どれだけ憧れようとも、どれだけ傍に居続けていたとしても、自らの望みを憎む形であれ叶えてしまった以上、自分は憧れの存在の下には立てない。その下に立つ者に、拒まれた。

皮肉げに口元を歪めたアーチャーは、腰まで消滅が達しているのを確信し、マシユではなくカルデアへと告げる。

「いいか。この特異点は、仮にも聖杯戦争の地だ。その聖杯に呼び出されたサーヴァントが競い、勝者を決め、その万能機を掴み取る為の戦い。当然最後に残った者が勝者となり、その聖杯を手取る事が出来る。そして」

その消滅が首へと届いた時、強大な魔力反応が浮かび上がる。漆黒ではあるものの、堕ちたものの、その意は決して揺るがない聖剣の輝き。

天に届く、その刃は——立香達が集う、その場を飲み込もうと放たれる。

「この場に残る聖杯戦争のサーヴァントは、かの騎士王ただ一人だ」

## 肌刺す熱に

極光の反転。光を呑み、熱を喰らい、大地を削る。本来の『誓約』を以って封じられた『約束された勝利の剣』とは差異が生じてしまうだろう。全ての封印が解けた善の剣に比べれば酷く劣る威力ではあるが、高々軍勢相手ならば、常に七つの封印が解けていると言つていい反転された剣は充分過ぎるほどに強力だと言つていい。

その黒光の渦が狙うはたった四人。広範囲に放たれたそれは、四人を容易く呑み干す――が。

「はい、サイドチェストって感じでね。広範囲への攻撃なら威力は落ちている筈だし、浴びる時間も少ない。だからダメージはそこまで大きく無いんだよね！」

やはり反射神経も桁外れている。立香は咄嗟に強化魔術を発動してオルガマリーを庇い、マシユは清少納言を庇い、その剣を凌いだ。

……いや、理屈としては確かにそうなのだが。例え威力が分散されていようが、サーヴァント。しかも最優のセイバークラスによる宝具に直撃しながらも無傷でいるのはおかしい。

が、それも今更なのだろう。シャドウサーヴァントの惨状、アーチャーとの戦闘風景を見守ってきたカルデア側は勿論、その筋肉の圧を感じていた最後のサーヴァント。セイバー——騎士王、アーサー・ペンドラゴンも当然だといったように笑みを浮かべて頷き、唯一挟れていない大地から歩み寄る。

「流石だ、とても言うっておこう。人類最後のマスターよ。貴様は身体能力だけならば、サーヴァントの領域……いいや、その粋さえはみ出ると言っている。しかし、それだけじゃないからこそサーヴァントは英<sup>サーヴァント</sup>霊足りえると心得よ。……構えろ」

「……！ マシユさん、盾を！」

「はい！」

『——おかしい。待つて藤丸君、そのセイバーとの戦闘はっ』

ロマンは焦り、立香を止めるべく声を出す。しかしそれは、騎士王の威圧が許さない。

「最大威力の魔力を収束。対城宝具を対人領域へ。捕捉四名。——光を呑め」

ただ静かに真名を解放し、その荒々しき魔力とは裏腹の、ゆったりとした動作。振り下ろされた闇は、一瞬にして立香達を呑み込む。しかしマシユもマシユで、己の先輩を守ったことによる自信で相応に成長している。宝具の発動は感知済みだ。その盾を地に突き立て、叫んだ。

「所長から付けてもらったこの仮名なを宝具として、疑似解放させて貰います！  
ロイド・カルデアス  
 人理の礎！」

半透明な盾が膨張し、この場にいる四人を包み込むように展開された。

その剣は目の前でせき止められる。しかし流石に、本来対城である宝具を捕捉四名にまで凝縮させただけにはあり、完全に破壊されるのが目の先だとも言うようにひび割れていく。

マシユは苦悶の声を上げるが、背中を支えてくれる立香、そして確かな上昇具合を感じさせてくれるオルガマリーの支援魔術。支えてくれる人がいるから、負けるわけにはいかない。



「極光は、反転する」

再びチャージされる化け物染みた魔力。静かに、でも荒々しく。その黒く染まった光は、先ほど襲った魔力と同等の出力を秘めている。セイバーの魔力量は怪物染みていて、対してマシユは満身創痍。威力が落ちていれば立香でも耐えられるが、この出力の宝具を生身で受けて無事でいられる筈がない。

そう。だからこそ立香は動く。

「——む」

マシユが盾で受けている最中、その奥を見続けていた立香は、セイバーが不自然な程に脱力していたのを見抜いていた。其処から連想されるのは、塞がれた後に直ぐ再度振り下ろす事。つまり、連続で放てるという「可能性」。

対アーチャー時の時と同じく脚の強化を行い、互いの宝具が消滅した直後の全力失踪。例え反応出来たとしても、立香の拳を防ぐ術はない。その筋肉によって放たれる一撃はサーヴァントの霊格を容易く貫く。

——では、それ以上に早く攻撃するだけだ。侮るなかれ、セイバーは違う側面になった事で多少宝具に制限が掛けられてはいるが、それで尚トツプクラスのサーヴァントである。その直感性と、乱暴にも似た聖剣の冴えは、それだけで並のサーヴァントを一掃できる。

例え風に加護が無くても。例え誓約解放による一時的な超強化が無くとも。例え、鞘が無くても。この場にいる四人程度、容易く勝ててしまうのだ。

「聖剣、神速解放」

『スキル・直感』により、立香の動きは予め感知。魔力の出力を大幅に変更し、早期の発動。対城宝具並の出力は対人レベルの魔力量へと下がるが、それでも魔術を覚えたばかりの素人相手には充分すぎる火力だ。

ただ一つ誤算があるとすれば、その筋肉が飾りでは無く、純粋な耐久力だけならばサーヴァントさえ超えていたという点。

「くっ……不意打ちも無理か」

でも確かなダメージは入っている。最初は『硬化』の効力を持つて強化していたからダメージは通らなかつたが、今回は素の耐久力のみ。その肉体によつて限りなく衝撃を受け流せたし、繊細な筋肉操作で当たる面は極力少なく出来た。でもダメージは通る。いつも笑顔の立香は、この時ばかりは険しい顔を見せた。アーチャー戦でも崩す事なく保つていた笑顔を、だ。打つ策が無い何よりの証拠。

「卑王鉄槌、極光は反転する」

再び剣に纏う魔力。ここまで来れば嫌でも察する。この聖杯戦争の不思議な点として、筆頭に上がったのが『マスターの不在』だ。それは魔力を供給する主が居ないと同意。であれば、現界時の保有魔力が全てでは無いのかと。

それは事実で、だからこそセイバーは一番魔力を使うとされるバーサーカーを単身で仕留められたし、キャスターを除く全てのサーヴァントを倒せたのだ。アーチャー、バーサーカーを除けば、他は全て異例のクラス現界だったから。

だがキャスターは存外にしぶとい。瞬間的な魔力放出のみでは倒せなかつた。しかしそんなキャスターをカルデアが倒してしまったから、この聖杯戦争に終着が訪れ——  
—そしてセイバーは『聖杯』を手にした。

ロマンが驚いていたのはそれが理由だ。幾ら最優のクラスたるセイバーであったとしても、供給無しの魔力量では限界がある。それにも関わらず、サーヴァントの域を超えた魔力量。マスターが居るならば理解はできるが、マスターが居ない今、決められた魔力量を上回る事など不可能だから。

でも聖杯があるならば話は別。本来万能の願望機として位置するそれは、使い方を変えれば莫大な魔力補完道具だ。例えばセイバーの最大火力でも、最低百は放てるだけの貯蓄がある。

マシユは最大火力を一発受けるだけで満身創痍。立香の必殺とも言える一撃は、それより早くセイバーの一撃が放たれるだけ。残るは優秀なだけのマスター適性もない魔術師と、*「弱い」*を自称するサーヴァント一騎のみ。

待ち受けるのは、「絶望」の一言である。

『『ガンド』！』

それでも下を向いている暇はない。まだ終わってないのだから、自ら終わらせに掛かる必要などどこにも無いのだ。

オルガマリーから放たれたガンドは真つ直ぐ飛来しセイバーへと向かうが、魔力が収

束する剣を一振り。咄嗟に倒れ込んで回避したが、後方の壁を容易く破壊するその威力に目を泳がした。……けどそれも一瞬。表情を取り繕い、足を震わせるが、真っ直ぐセイバーを睨みつけた。

「……ほう。脆弱な魔術師と、そう思っていたが。気力は充分らしいな？」

「ええ……毎日毎日プレッシャーに耐えて、吐いて、自分を見失って……。乗り越えた事なんてない。それでもやらなきゃいけない。褒められる事すら無い日常の中——報われた時が来た」

オルガマリーは立香へと視線を移し、口元を緩め、胸に手を当てて高飛車に、でも優雅さを残して叫ぶ。

「私はオルガマリー・アニメスフィア！ まだ滅びきってない人類史の行方を守る、『人理継続保障機関カルデア』の所長！ 例えもう報われる事がないのだとしても、私はこの足を決して折らないと決めたのよ！」

「姿形名称は違えど、貴様も上に立つ者か。……賞賛しよう。世界が滅び、人理は99.9%焼滅した。確かにまだ残ってはいるが、それも粗末で、英雄の剣一刺しで全てが無

くなる崖の端にて、プレッシャーに耐え立ち向かうその無謀さ。……ああ、称賛しよう」

王ではない。でも自分の役目を果たさんとばかりに、脆弱な身でありながら立ち向かうその意思。王の意を以ってして敬意に値する。

「だが、名誉も誇りも全ては無に帰すのみ。生憎とこの私は容赦がない。情けも同情も与えん」

魔力放出。剣に纏う黒き光は、すべてを呑み干さんとばかりに天へと舞い上がる。天を貫通した其れは、この世界の全てを呑み込む強大な魔力と化す。

魔力凝縮。天を貫いた荒々しい魔力は、その全てが剣に纏い付き、今か今かと暴発しそうな勢いで唸る。禍々しくも神々しさが混じる漆黒の光に、オルガマリーは仁王立ちで見据えた。

「……………大した人間だ」

歴史上、英雄の記録の中でも、例え半分の拘束解除でさえトップクラスに位置する宝

具を前にして、その堂々たる覚悟。並の人間ならば……いや、まともな精神であれば屈してでであろう威圧をその前に、震えながらも立ち上がる。

思わずといった風にセイバーは言葉を零す。だがそれも全ては無に帰すだけ。褒めようが、貶そうが、何も意味は無いのだ。

「受け取るがいい——エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣ッ!!」

今まで静かに放たれていたモノから一転、怒号を上げるが如く宝具を叫ぶセイバーから放たれたのは、単純な威力だけで言えば先程までと全く変わらない最大火力。だがほんの僅か、遅い。と言ってもオルガマリーのような魔術師が避けられる程ではなく、本当に「もしかしたら」レベルの些細な違いだ。

唇を噛んで、それでも目は逸らさず黒い光を見つめる。いざ呑み込まれようとする時、オルガマリーの上空から、目の前へと人を覆う物質。盾が勢いよく飛来し、突き刺さる。盾だけではなく、マシユと一緒に。

「ハア……ハア……所長は、やらせません……っ!」

満身創痍。受けれる保証はもうない。それでも立香から教えられたポーズを全く崩さず、受け切る覚悟を以って盾を支えていた。嫌われても仕方がないと思っていた相手に守られる。オルガマリーは一度目を見開くが、口元に笑みを浮かべた。

キツと前を睨みつけ、声を張り上げる。

『人理継続保障機関カルデア』一般枠所属、藤丸 立香へ命じます！ 『令呪』を以って、マシユ・キリエライトを支援しなさい！』

「——令呪を以って命ずる。マシユさん、宝具を！」

「はいっ——」 ロード・カルデアス 人理の礎ツツ！」

またも半透明な盾は膨張し展開される。先の一件でどれだけ感覚を掴んだのか、今度は『城』が形を見せる事もなく、その宝具と拮抗を重ねる。しかしセイバーの「工夫」はその為にある。微かに遅かった宝具は、『持続性』を重視して放たれた一撃。それはつまり、マシユともう一度交える可能性を考慮しての攻撃という訳だ。

先程はマシユが防いでいたが、それもギリギリ。セイバーの一撃が発散された直後でマシユも倒れたのだ。ともすれば、ほんの少し持続性を維持すれば勝てるのは自明の理。当然セイバーはその選択を取るだろう。

苦悶の声を上げるマシユに、立香は再度右手を前に突き出した。

「再度令呪で命ずる——再度……サイド……」

「え、ちよ……」

「はいっ、サイドチェストツ!!」

「こんな時までそれやるかちゃんマスツ!」

服四散の悲劇が起こる事はないが、筋肉の一瞬の膨張はまたもなり、背景が歪むようなマツスルポーズを見せられる。

こんな時でさえ平常運転な立香に、清少納言は思わず突っ込んでしまった。シリアスだったのに。シリアスだったのに、その筋肉が一瞬で空気を変えた。筋肉は万能だった。人の身体強化のみならず、健康維持にも役立ち、拳句にはシリアスブレイカーとして活躍するのだから。

セイバーは失笑し、オルガマリーは笑みを零し、マシユは強気な笑みで地に足を沈める。

「了解です、先輩!」

マスター

「え、何の了解!? これ何か意図があつた!」

——意図があつたかと言えば、その通りだ。何もふざけてマツスルポーズを取つたわけではない。普段通りの彼を見せる事で、当たり前前の日常を意識させた。病は気から、肉体は気からと言うだろう。確かに追い詰められた人間は予想だに出来ない力を発揮する事はある。でもプレッシャーを感じて心折れる人が殆どなのだ。

マシユ・キリエライトという『人間』は、そうである。今までの彼女ならば与えられた使命を果たそうと淡々に熟すだけだっただろう。しかしデミ・サーヴァントとなつて、自分に出来ることが増えた中、『自分にしか出来ない』というプレッシャーは計り知れないモノとなる。

……まあ、立香の場合は『敢えてやった』というよりも『自然とやってしまった』という理由の方が強いのだが。マシユにとっては、それが何よりも心強かった。

余計な力を抜く。片足を一步引き、腰を下げ、全身で盾を支える。

(——この攻撃を防ぎ切つても、きつとまた、セイバーさんは同じ事を繰り返すだけだ。何で防いでるのか、頑張るのか、意味を失いそうになる)

セイバーが所長に語った通りだ。どれだけ頑張つて名誉を重ねても、誇りを貫いても、全ては一刺しで無へと帰す。その手段をセイバーは持つており、使う事を躊躇わない。

では何で頑張る？ 理由は——果たしているのだろうか。

（でもっ！ この一瞬、この刹那。私は抗い続ける！ 一秒を、一瞬を、全力で生きたいから！ 今を生きる為に、未来を取り戻す！）

誰かの為だとか、全てを救いたいからだとか、そんな顔が赤くなるような理由なんていらない。自分の為に頑張つて、自分の為に必死になつて、自分の為に生きる。

生まれた事こそが生きる意味。ただそれだけで良いだろう。

「アアアアアアツツ!!」

「ツ……満身創痍の身で、我が剣を二度も……!」

まだ拮抗状態。互いの宝具は晴れていない。それでもセイバーは確信した。この剣は防がれると。それでも発動を停止しないのは、マシユを脅威と認識したからだ。限界

まで削らなければ、例えば足が折れても腕で立ち上がる。自らを信じた者は、自らの意地を通す者は、それ程までに強い。

冷徹な仮面を被り、決して見せる事など無かつた感情。その仮面は立香のマツスルポーズで崩れ去り、今や猛獣の如き獰猛さ。目は全開に見開き、咆哮を上げて力を入れる。

矛と盾。再度ぶつかり合う二つに隠れて、清少納言は思った。

(……なすびちゃん、多分これからなんだよね。自分の成したい事をやるのは)

一度、目を瞑る。纏められた髪を解き、その長い髪を風に揺らした。

(ねえ、定子様。私は貴方の為に筆を持ち、貴方が終えて筆を下ろしました。でも、いいのかな。誰かの為に書いて終えたこの身が、もう一度——今度は自分の為に持つても、良いのかな)

靈基の変質。基本的にサーヴァントは全盛期の姿で現れるらしいが、何事にも例外は存在する。無理やりクラスの枠に当て嵌めた結果、それに釣られてステータスの弱体

化、姿形の変化が起こるのは珍しくない。例え全盛期の姿であっても、全盛期の能力では無いのだから。

だから霊基は簡単に変わるし、成長……というより、在るべき能力の獲得も出来る。要は全盛期へと戻っていく事さえ起こり得るのだ。

髪色は全てが黒となり、衣服の類は袴と化す。筆を持ち、正に『平安時代中期の女流作家』の姿そのものである。

突然変異した姿にオルガマリーと立香は驚いた。

「ねえ、ちゃんマス」

そんな二人を、そして盾を支えるマシユを見て、今まで通りの笑みを見せながら頼み込む。

「お願いがあるんだ」

## 元世を想き

「くつ、あ………！」

「マシユ！」

マシユと盾は弾かれる様に地を離れる。しかし黒い光が彼らを呑み込む事はなく、マシユが弾かれると同時に消失した。

セイバーは何処か寂しげにマシユを見つめながら剣を構え、魔力を充填。オルガマリーは急いで治癒魔術を掛けるが、応急処置もいとところだ。直ぐには治らないし、失った魔力の充填は即座に行うのは無理である。カルデアも今は万全の体制ではない。

——でも、今の「防ぎ」で盤上は整った。

「令呪を以って命じる」

「その娘はもう使えないぞ?」

「——清少納言、宝具を！」

「おけ、ちゃんマス！」

「……………!？」

この場にいるもう一騎のサーヴァント。優秀と言われている三騎士の一つたるアーチャーのクラスでありながらも、弓すら持つている様子がない、自他認める弱小サーヴァント。セイバーも大した魔力を感じていなかったからこそ警戒をしていなかったが、「宝具」とまで言われてしまえば流石に警戒は高まる。

そしてもう一つ。ランクダウンこそしたが未だに残る『直感』のスキルが、それを使わせてはならないと騒ぎ出す。

「くっ……………！」

「っ、出力が溜まりきってないなら、僕でも防げるよ！」

「しまっ」

直感は100%の感知能力じゃない。やるべき事を教えてくれるスキルでもない。だが反転する前のそのスキルは非常に優秀で、騎士王を王たらしめた能力の一つだ。だからこそ、セイバーはそのスキルを信じる。記録に残り身体に染み付いてる感覚が、ラ

ンクダウンしているそれを信じさせてしまった。

結果、強化を重ね筋肉を膨張させた立香によって、傷こそ残してはいるが防がれてしまふ。

「——『理想は守護にあり』」

（詠唱式かつ、侮るな！ その時間を私にも与えるのと同義！ 宝具ごと我が聖剣で薙ぎは——ら、う……？）

「『海の如き空、生命いのちの地、斯くたるは運命さだめの未来さき為りて』」

魔力の流し方が可笑しい。あくまで感覚的なものではあるが、本来宝具を放つ場合は『何かに収束』し『凝縮』して放つのが基本だ。広範囲であればあるほど、その威圧は一部に集まる。最初からバラけさせて放つのは威力を最低限にまで減らす最悪手だ。

だが、そもそも根本的から宝具の在り方が違う。現在の清少納言の魔力は『包み込む』形で発動されていた。

「『祖そは其しの繋ぎ手なり』——つまりこの世はいとエモし！」

「まさかこれは……ッ」

「エモーションナルエンジン・フルドライブ  
枕草子・春曙抄!!」

「固有結界か!？」

セイバーの魔力は、まだ溜まりきっていない。でも放つ他は無い。固有結界とは、固有結界という枠組みであるだけで厄介な能力。本来ならば存在するかも怪しい、魔法に近しい力ではあるのだが、確実に存在しているとセイバーの霊基は覚えている。

だからこそ、固有結界を発動させる前に倒さねば、それこそ聖杯を持った騎士王でも負けてしまう可能性があり得る。故に立香が防がない事を願った超速攻。しかし、放たれた黒き光は、清少納言の魔力によって上書きされた。

——リアリティ・マープル 固有結界。現実世界を心の在り方で塗りつぶす、魔術の最奥。術者のただ一つの内面を映し出す心象風景の具現化……なのだが、こと清少納言に於いては別物となる。

清少納言が放った宝具は間違いなく固有結界だ。しかし固有結界内部の風景は、個々によつて変わりゆく。清少納言が感じたもの、清少納言が与えられるもの。そして何より、対象者に於ける『懐かしさ』を思わせる風景を強制的に見せる。

相手を閉じ込め、相手の攻撃を無に帰し、相手の戦意を削ぐ。幻想的に美しく、そして残酷な宝具である。

緑が広がる大地。見上げる空は海の様な青空。温かな風が吹く中で、選定の剣が目の前に立つ。一度目を閉じ開けば、円卓の場。目を開けば必ず居た筈の幾多もの騎士は居ない、空っぽな場所。再度目を閉じ、そして開く。天からの光が湖を差し、幻想的な光景を――

「ふぎけるなっ!」

その上から塗りつぶす様に放たれる、黒い光。木を呑み込み地を抉り、光を斬り裂く反転された光。

それが晴れる頃には、無傷の幻想が視界に広がっていた。確実に抉り取っていた筈のモノが、一瞬で再生して。

「ふぎけるなっ、ふぎけるな!」

何度呑み込もうと、何度破壊しようと、必ずその幻想は蘇る。それこそ星を破壊し得る『対界宝具』や『対星宝具』クラスの威力がなければ何度でも再生するだろう。

セイバーは怒り狂う。

「朽ち果てぬ理想などない！ 追い求めていたモノに絶望する事など何度体験すると思っている!? 諦めなければ叶うとも言うつもりか!？」

何度も、何度も。溜めなど作らず、その魔力を何度でも振るい続ける。

「それを悟ったから私はこの姿となった！ 無情な王として生涯を終えた！ なのに……」

破壊しては再生し、破壊しては再生し——やがてセイバーは、塞ぎ込む様に縮こまる。

「その無情たる王故に、理想を貫けたとも言うつもりか……っ!」

セイバー、騎士王<sup>アルトリア</sup>アーサー・ペンドラゴンの反転していない状態が持つエクスカリバーは、その強さ故に円卓による封印がなされていた。その封印が全て解けたならば、対星宝具にまで届くほどの力を放つことが出来る。

つまりアーサーは、常に星を破壊出来るだけの——この固有結界を破れるだけの力を秘めた宝具を持つていたと言っている。しかし反転されたセイバーは、せいぜい対城宝具のレベルまでが限界である。

この固有結界を破壊出来る力があるから、理想を叶えられなかったとしても言うかのように。この固有結界を破壊できないからこそ、理想を叶えられたのかもしれないと言うかのように。諦めたからこそ堕ちたその姿で理想を貫けと言う様に、この固有結界は美しい幻想を突き付ける。

「ん、ぶっちゃけそこまで考えてないんよね。あたしちゃんは見てみたい光景を、思ったインシヨーを綴っただけだし」

だがそんな考えは一切ないと、縮こまるセイバーの前に清少納言が現れる。

「ちゃんマスが諦めない顔は素敵……じゃなくて！ ちゃんマスやなすびちゃん、ちゃんマリーなんかさ、みんな目の前の事に必死になってる。守りたいモノを守ってる。守りたいモノも守りたいモノはあつたんだらうけどさ」

セイバーが顔を上げれば、清少納言はとびつきりの笑顔でピースサインを見せながら、言い放った。

「義務感とかそういうの全部無視して、自分の感情に従ってみても良かったんじゃない？」

「……はっ、感情だと？ 不老の身を授かり、龍の因子を持ち、冷酷無比に徹したこの私に感情任せに動けど!?! そんな事で救われる民が何処にいる!」

「少なくとも、王サマは救われるんじゃない？ あっ、王サマに想われた人もか」

「は……?」

「あたしちゃんとか王サマも、みんな“人”なんだよ。当たり前前の感情があつて、当たり前前の想いがあつて。それで『生まれもつたのだから、その力を使え』なんてさ、すっごいバカらしい。結局は本人の意思を無視する為の体の良い言い訳じゃない？ まるで力ある人を機械と認識してるみたい」

「……私は望んでこの道を歩んだ」

「頼つて欲しかった仲間の声を無視して歩む事が、本当に望んだ道だった？」

「ならば私は、どんな道を選べば良かった!」

「さあ?」

怒りと共に湧き上がる虚無感。そう言われたとて、「信じる」だけで開かれる道ならばそうしただろう。しかし宮廷魔術師の眼があればそれを見抜いていた筈だし、セイバーだってそれに従った。でも無かったのがこの絶望の結果である。

過去を振り返り、叫ぶセイバーに、清少納言はすつとぼけた様な顔で首を傾げる。

「どんなモノ選択したって、きつと後悔はある。それが人だから。……つーかさ、こんな堅っ苦しい話やめない？ どうせもう過ぎた事なんだしさー、「後悔がある」でいいじゃん！ それを受け入れようが受け入れまいが当人の勝手だよ！ あたしちゃんはもう考えるのがメンドイ！」

「おい」

「につひひく、可能性なんて幾らでもあるんだもんねー！ 王サマの知りたい答えなんか、我儘に生きた王サマが教えてくれるんじゃない？ 知らんけど！」

「……ふっ」

「あつ、笑った？ 笑ったよね?! うつそ美形だと思つてたけど予想以上に可愛い！ いやまああたしちゃんには及びませんけど！ ……うん、及ばないかな？ でもファンデとか無しであの美白肌はおかしくない？」

「先程まで攻撃されていたというのに、呑気な事だな」

「だって昨日の敵は今日のホモ！　じゃなかった、友って言うっしょ？　王サマの攻撃する気配なんてもうしないし、一緒に語り合おうぜい！」

「何を語り合うと？」

「……………チエケラ〜！」

「能無しか、貴様。……………ふっ、確かに戦う気力は……………もう無くなってしまったな」

「イエーイ、あたしちゃんの勝ち！　なんで負けたか明日までに考えといて？」

「ぶん殴ってやろうか」

「ポーリヨクハンターイ！」

ダブルピースで満面の笑みを浮かべ煽りまくる清少納言に、セイバーは苛立ちながらもスツキリとした表情で空を見上げる。直接的な攻撃を喰らった訳でもないのに、靈基にダメージが入った様に体は動かない。大の字で寝そべるセイバーの隣で、全くの警戒心も無く、本当に友達と横並びになる様に、清少納言は寝そべった。

「……………もし同じ時をもう一度過ごせるとなった時、今度は円卓の皆と友人の様に振る舞いたいと言ったら……………貴様は笑うか？」

「全力で笑う」

「はは、ぶつ殺す。……貴様はどうだ？　もしもう一度同じ生を送れるとして、貴様はどんな道を選ぶ」

「あたしちゃんは一、そうだね」

世界が光に包まれる。幻想的なモノではない。世界の終わりを告げるが如く、結界は崩れゆく。

そんな中で問われた「同じ生の行く末」。さてどんな奇天烈な答えを言うかと考えていれば、清少納言は聖母にも似た優しい笑みを浮かべながら胸元に手を置き、答えた。

「何度でも、同じ生を歩んでたよ。私は定子様が、大好きだから——」

◇◆？◇

「なるほど、つまり固有結界とは……」

「そう。魔術師が目指すべき境地で、使い手がいるなら誰もが求める対象よ。サーヴァントだもの、使い手が居ても不思議ではないと思っただけ……まさかあの娘が使

「手とは想わなかったわ」

『……… 魔力反応だ。藤丸君、気を付けて。固有結界は必殺の技じゃない。必ずしもセイバーが倒されているとは』

「いえ、ドクター。アレは……」

聖杯のリンクがセイバーと繋がってる以上、固有結界の外側にいる立香達はやる事が無い。清少納言への祈りと、知識不足な立香への説明を行なっていると、やがてこの場の一部が光り輝き、魔力反応を示す。

魔力反応がある以上、倒した訳ではないだろう。だからこそその警戒への催促。しかしそれに被せてマシユは声を出す。その視線の先にいるのは、大の字となって倒れているセイバーと、立香を見てピースサインを送る清少納言の姿だった。

その場の三人は顔を見合わせ、走り気味に二人へと近付いていく。

「………全く、無様な姿だな。座に携わる王が寝つ転がり、ただの兵に見下ろされようとは」

「いえ、そんな……」

「藤丸 立香。人類最後のマスターよ、貴様に問おう。既に滅びが確定されてるにも等

しいこの世を、何故救おうと足掻く？」

——世界を滅ぼせるだけの力となれば、例え元凶の見当が付かなくとも、それだけ強大な敵だというのは馬鹿でも分かる。それを理解して立ち向かうというのは、それが出来るのが自分だけという義務感からか。

それでは自分と……。そう思い、先程の幻想とは違う真つ赤に染められた空を見上げていると、立香は迷う素振りもなく答えた。

「折角出来た後輩や友人と、もっとと過ごしたいから。……じゃ、ダメですかね？」

「……なるほど、人理を救う気は更々ないと」

「いや、まあ……僕も人間ですし、寿命いっぱい筋肉を鍛えたいです。その為に必要なのが世界存続なら、世界も救わなきゃな……って」

「いや其処まで筋肉に拘るか、もうちよい生に拘れよ。……うん？　でも筋トレするには生きなきゃいかんし、結果的にはそうなるのか……？」

「つはは、何たるエゴイストか。貴様の方が余程王に相応しい。……そうさな、一つ忠告を入れておこう」

爽やかイケメンスマイルはほんの少し困り顔になりながらも答えを出す。何処までも筋肉に拘る立香に清少納言は思わず突っ込むが、結果的には普通の人が出す答えを言ってるのかと混乱。

セイバーは思わず笑みを溢し、一息吐いて言葉を紡いだ。

「藤丸 立香。貴様の今の状況は……まあ違いは当然あるが、私の生前と似ている。よく覚えておけ。義務感を以って及んだ結果が、アーサー・ペンドラゴンという生だ。義務感で世界を救おうとしたその時、貴様は私と同じ場に堕ちるだろうよ」

「……そう、かもしれないね」

「ふっ、ここの『違う』と言わないのが貴様の美德だな。分かっているならば皆まで言うまい。……そして次に一つ、頼んでおこうか」

「頼み？」

セイバーはマシユの盾に視線を移すと、やがて地に手を着けて体を支え、無理矢理に身体を起き上がらせようとする。立香が背中に手を当てて支えると、セイバーは右手の甲を立香の心臓部分に当てた。

「ホントに凄まじい筋肉だな……んっん。……人理を修復した後でもいい。いずれこの私を呼び、貴様の結末を見せる。感情を基に我儘な生を送った貴様の、旅の果てをな」  
「……貴方を呼べたのなら、百人力です」

「ふ、だろうな。その物書きよりは、ずいぶん役に立つだろうよ」

「おい流れであたしちゃんをデイスるな。王サマを倒したのあたしちゃんなんですけど  
！」

クツクツクと喉を鳴らす様に笑うセイバーと、いつの間にかパリピモードな混合髪色と服装に戻っている清少納言。普段の笑みで立香が見守っていると、やがてセイバーの左腕が消滅を始める。

「む……もう退却か。マシユ・キリエライト……と言ったか？」

「は、はい！ 王よ！ ……？」

「我らが主を、貴様に託すぞ。唯一無二の盾で守り抜いて見せよ」

「勿論です……！」

何処か自身以外の意思干渉が働いた様な違和感に、マシユは疑問符を浮かべるが、託

されたモノは議論の余地も無い当然な事。心臓部分に拳を置き、片膝を着き、頭を垂れて誓いを交わす。

——聖杯の付近から、コツコツと足音が鳴り響いた。

「全く、忌々しいガキどもだ」